

知の蓄積と活用に向けた方法論的研究 研究活動報告

目的 本部門の目的は、人文科学や社会科学の諸領域における知の生産、蓄積、活用のプロセス、およびこのプロセスで用いられる多様な資料やデータの収集と取り扱いの方法について学横断的に検討すること、その過程で、各領域で実践され形成されてきた知の生産手法、資料やデータの収集・取り扱いの方法および方法論、分析枠組みについて相互理解を深め、新たな比較研究枠組みの構築にむけた相互補強的な研究交流をおこなうこと、である。

活動 実質的な活動は、当初の予定を遅れて 2013 年夏から開始した。これまでに運営会議のほかに、研究会（6 回）ならびに講演会（1 回）を開催した。その詳細は、研究履歴欄記載のとおりである。第 1 回から第 5 回までの研究会では、アーカイビングに取り組んでいる研究者が、その実践内容を紹介し、そこでの課題を具体的に提示し、解決にむけた方策を中心に議論した。対象としてとりあげた資料は、順に、石炭産業資料、オウム真理教関連資料、裁判記録資料、伝記資料、東日本大震災関連資料であり、学問領域では、社会学、日本史学が中心であった。

その後、第 6 回研究会は、中間総括「『社会的』記憶装置としてのアーカイブ」として、5 回の事例報告をもとに、議論を整理する場とした。そこでは、現用価値と歴史的文化的価値、公共的価値と学術的価値をあわせもつ社会的記憶装置としてのアーカイブズに関する議論が展開された。この議論は今後さらに精緻化が必要である。

成果 現時点で共有されているキーワードは、前向き prospective 収集／後ろ向き retrospective 収集、汎用性、デジタル化の功罪、「風景としての資料」（アナログ・アーカイブズの価値）、アーカイブズの更新（アーカイブズの再帰的再生産）、構築作業の負担とその作業に対する正当な評価、である。

これらの研究会の副次的な成果として、各資料・領域でのアーカイビング作業が抱えている課題の多くが共通していることを理解した。なによりもアーカイビングの現状が、きわめて事態の緊急性から無計画に進められたことが明らかになった。さらに、アーカイビングの実質的な担い手が主要には若手研究者であること、アーカイビング作業が、彼らを育成する機能をもつと同時に、過重な負担から阻害機能をもつことも指摘された。専門的アーキビストの理解、育成・活用体制が未整備である日本におけるアーカイビングの決定的な欠陥ともいえよう。

研究会：

第1回：2014年2月22日

「石炭産業研究における資料アーカイビングの現状と課題」（報告者：嶋崎尚子）

第2回：2014年4月23日

「若手研究者から見たアーカイブ作成の効果と課題—教団資料データベース作成の現場から」（報告者：平野直子）

第3回：2014年7月26日

「裁判記録の学術利用をめぐる可能性と課題」（報告者：藤野裕子）

第4回：2014年11月29日

「伝記の資料所蔵先」（報告者：鶴見太郎）

第5回：2015年1月28日

「浜通りにおける震災アーカイブズの課題と可能性—「はまどおりのきおく」の実践から」（報告者：川副早央里）

第6回：2015年3月23日

「『社会的』記憶装置としてのアーカイブ—アーカイブの課題と展望」（報告者：原科達也）

講演会：

「カウンターモニュメント：現代ドイツにおける記憶の文化」南デンマーク大学准教授 Kathrin Maurer 氏（2014年10月21日）